

Obituary of the Late Dr. Genkei MASAMUNE

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Satomi, Nobuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055677

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



おわりに

以上のように、フサザクラの葉面積および葉形に関して、西南日本から東北日本へかけての地理変異が認められた。ここでは、そうした変異の要因として分布地の環境条件の違いを示唆した。しかし、そうした変異が遺伝的に固定しているのか、あるいは環境条件の違いに応じて可塑的に変化した結果として現れたものかは明らかにならなかった。また、今回の調査は先端部長枝の当年枝上の大きな葉のみを対象としたもので、個体全体での葉面積の増加や葉数の変化は検討していない。したがって、個体レベルでみた場合に全体の葉面積がどのような地理変異を示すかは今のところ明かではない。以上の点は今後の課題である。

引用文献

- 萩原信介. 1977. ブナに見られる葉面積のクラインについて. 種生物学研究 1: 39-51.
- HORIKAWA, Y. 1972. Atlas of the Japanese Flora. 500 pp. Gakken Co. Tokyo.
- 堀田 満. 1974. 植物の進化生物学 III. 植物の分布と分化. 400 pp. 三省堂, 東京.
- 河野昭一. 1974. 植物の進化生物学 II. 種の分化と適応. 407 pp. 三省堂, 東京.
- KAWANO, S., IHARA, M. and SUZUKI, M. 1968. Bio-systematic studies on *Maianthemum* (Liliaceae-Polygonatae) IV. Variation in gross morphology of *M. kamschaticum*. Bot. Mag. 81: 473-490.
- 河野昭一・長井幸雄・鈴木昌友. 1980. 日本列島におけるツクバネソウの地理的クラインについて. 植物地理・分類研究 27: 74-91.
- 大野啓一. 1983. 山地溪畔林. 「日本植生誌 中国」(宮脇昭編), 328-336. 至文堂, 東京.
- 大野啓一. 1984. 山地溪畔林. 「日本植生誌 近畿」(宮脇昭編), 342-351. 至文堂, 東京.
- 大野啓一. 1985. 山地溪畔林. 「日本植生誌 中部」(宮脇昭編), 256-262. 至文堂, 東京.
- 大野啓一. 1986. 山地溪畔林. 「日本植生誌 関東」(宮脇昭編), 300-303. 至文堂, 東京.
- 大野啓一. 1987. 山地溪畔林. 「日本植生誌 東北」(宮脇昭編), 201-204. 至文堂, 東京.
- 大野啓一. 1990. 冷温帯湿生林. 「日本植物群落図説」(宮脇昭・奥田重俊編著), 166-199. 至文堂, 東京.
- 佐々木寧. 1982. 山地溪谷林. 「日本植生誌 四国」(宮脇昭編), 332-335. 至文堂, 東京.
- 上野雄規. 1991. 北本州産高等植物チェックリスト. 365 pp. 東北植物研究会. 宮城県白石市. (received April 20, 1993; accepted Sept. 27, 1993)

○里見信生*：正宗巖敬先生を悼む Nobuo SATOMI*：Obituary of the Late Dr. Genkei MASAMUNE

本誌の前身である「北陸の植物」を創刊された正宗巖敬先生は去る6月18日、お亡くなりになりました。享年94歳でしたので、長寿を全うされたとは存じますが、御家族の方々は勿論のこと、私も先生の恩顧を受けた者と致しましては、なお、お元気に過されますよう願って居りましただけに、実に惜しまれます。

白鳥(本名忠夫、長男)・敦夫(次男)・得三郎(三男)の三兄弟を、世間では「正宗三羽鳥」と称して居ります。正宗先生はその中に加えられていませんが、それは末弟ということで、白鳥とは20歳、得三郎とでも16歳の年令差があり、各氏が早くから名を挙げて居られたというだけのことに過ぎません。実に御兄弟がすべて、各方面で活躍された優秀家系の御出身でございました。

先生は旧制第7高等学校を経て、東京大学理学部に学ばれましたが、鹿児島で過された3年間に、屋久島に魅せられ、再三渡島されて、その結果を学位論文(Floristic and Geobotanical Studies on Yakusima, 1934)にまとめられました。これより、南方の植物に引きつけられることとなり、大学を御卒業後は台北大学に赴任され、台湾は勿論、琉球列島の他、海南島・ボルネオ等、広く南方諸地域の植物の調査研究に従事されました。しかしながら、大東亜戦争の敗戦により、止むなく帰国されることとなり、一時、横浜国立大学に御勤務されましたが、昭和25年、金沢大学に転じ、昭和39年、定年退職までの14年間、白山を始めとする北陸地方の植物の研究は勿論、多くの学生の指導に当られて居られます。

御退職後は、居を神奈川県小田原市に移され、自由な時間を、ひたすら終生の研究課題とされたラン科植物の御研究に没頭され、「日本の蘭」1~6集を出版されたことは周知のところですが、今度、完成を見ずに生を終えられたことは、定めてお心残りであったと存じます。

ここに謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

(*〒921 金沢市久安4-359 Hisayasu, Kanazawa 921, Japan)